令和３年１月８日　　第６号

かわら版　育種の波動

全国新品種育成者の会発行

改正種苗法が可決・成立!!

参考人の金澤相談役が育成者の思いを熱弁

11/26 参議院農林水産委員会

今年の通常国会に提出され、審議が先送りとなっていた新品種の無断増殖、海外流失の防止を目的とした改正種苗法が、12 月 2 日の参議院本会議で・成立しました。新品種の開発者が栽培地域を限定できるようにし、指定地域以外での栽培、無断に海外に持ち出しての生産・販売に対する差し止め請求権を認め、農家の自家採取を許諾制とするものです。長年にわたる育種に対して、それに見合う対価を得ることは育成者の悲願であり、当会においても多くの方と対談して改正に対する正しい理解を持ってもらうための YouTube を作成した林さん、参議院の農林水産委員会で参考人として育成者の思いを述べた金澤相談役等、多くの会員が改正種苗法の成立のために奔走されました。

12 月 26 日参議院の農水委員会に参考人として呼ばれた金澤前会長は、これまでの育成者の苦労を吐きすように自民党、立憲民主党等の 7 会派の委員の質問に対し、「許諾契約が行われれば、増殖がどこでどう行われているかの情報がわかる。我が国の個人育種家も公共機関に負けずに育種に頑張っているが、長年経費をかけて育種したにもかかわらず、それを回収できていない者が多い。特に果樹は、20 年、30 年と長い期間をかけて作り出した新品種を、購入した生産者はどんどん高継ぎして増やして販売している。それなのに、育成者には最初に販売した苗木分の代金しか入ってこないという現状がある。このような状態では、良い品種を作っても世に出さない育種家もおり、これでは育種を志す者がいなくなってしまう。育種は、味覚、臭覚、視覚的にも消費者に豊かな生活を約束するものである。ロイヤリティが戻ってくるようになれば、育種への参入者も増え、日本の優秀な栽培技術等により、育種国家としての日本を作ることができる」等と、強く主張されました（農林水産委員会は YouTube で鑑賞可能）。改正種苗法は、2021 年 4 月 1 日から施行されます。

育種賞は奥隆善さん、育種功労賞は渡辺誠さんに決定！

今年度の育種賞、育種功労賞を検討する選考委員会（佐藤和規委員長）が 12 月 12 日に開催され、育種賞にチョコレートコスモス、ペチュニア、八重リンドウ等の奥隆善さん（三重県伊賀市）、育種功労賞に渡辺誠一さん（山形県西村山郡大江町）に授与することが決定しました。

奥さんは、世界初のチョコレートコスモスとキバナコスモスの交雑品種等を育成し、EU や北米でも品種登録を取って販売していること、実用性のある八重リンドウの品種を開発し、主産県の岩手県に生産許諾していること等が評価されました。渡辺さんは、10 品種以上のスモモの新品種を開発し、1 ヶ月半程度であったスモモの出荷期間を切れ目なく 4 ヶ月程度にまで拡大し、雪害に強いスモモの仕立て法を確立したこと、地域農家に対する技術指導、地域への新規就農者の受け入れと育成に努めていること等が評価されました。

「フラワー・オブ・ザ・イヤー」最優秀賞に輝く!!

金澤さん育成の「ローゼスピンクバイカラー万重 EX」

ジャパンフラワーセレクションの中央委員会が 11 月 24 日に開催され、鉢物部門で当会の金澤相談役が育成したシクラメン「ローゼスピンクバイカラー万重 EX」が最優秀賞であるフラワー・オブ・ザ・イヤーに選出されました。ボール状になる万重咲きの豪華な花で、枝垂れしにくくい改良され、鑑賞期間が 2 か月以上と長く、耐寒性が強く育てやすいのが特徴です。

ᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰᗰ

わたしの育種奮闘記

この記事は本人から聞いた内容を、本人の話し言葉で作成しています

消費者に信頼され、喜ばれる夢のブドウを追い求めて

♕花澤茂： 岡山市にある花澤ぶどう研究所の花澤茂です。岡山県東部の和気町の農家に生まれた私は、7 歳で父を失い、遊びより農業を手伝う日々を過ごしました。終戦後には、家族 3 人だった生活が、兄と姉の帰郷、叔父 2 家族の外地からの引き上げで 17 人家族となり、 食べ盛りの中厳しい窮乏生活を経験しました。その体験が、私の農業一辺倒の人生観を培ったのだと思っています。

昭和 30 年、岡山大学農学部を卒業した私は、翌日から県の農業試験場果樹分場に勤務、昭和 31 年からは県立精研高校（現井原高校）、昭和 44 年からは瀬戸農業高校（現瀬戸南高校）の教員となり、果樹園芸

を主体として営農指導、農業後継者の育成に努めました。昭和 56、57 年には県の初めての交換人事で、農業改良普及員としても勤務しました。この頃、我が国は高度成長期を迎えたものの、農業はそれと引き換えに衰退しはじめ、農業を志す若者が減少し、農業高校での後継者育成が困難となりました。それならば、自分が長年関心を持ってきたブドウで若者に夢を持 たせる儲かる農業経営を行って実証しようと、33 年余り務めた教員を辞し、平成元年 56 歳で花澤ぶどう研究所を設立したのです。

私は、昭和 43 年に現在の宅地周辺の農地を取得し、試作農場としました。昭和 30 年代後半、岡山県の ブドウの代表的な品種である「キャンベル・アーリー」 が他県産の「巨峰」や「種無しデラウエア」の進出で価格が低迷し始めました。私は、各方面の研究機関や篤農家を訪ねて「キャンベル・アーリー」に代わる品種を探しましたが見つかりませんでした。そこで、自分で品種を収集して試作研究しようと考えたのです。最高時には 270 もの品種を調べた結果、「キャンベル・アーリー」より優れた品種はありましたが、思うような品種を見つけることはできませんでした。それならば自分で品種を作り出そうと、私は育種を始めること にしました。今の人気品種がいつまでも売れ続けるとは限らないので、「従来品種を売る努力」より「売れる品種を作る 努力」が重要だというのが私の信念でした。

その後は、収集した欧州ぶどう約 300 品種を試作しながら、毎年約 30 組ずつ、全体で約 500 組を交配し、実生を育てて優良な個体の選抜を行ってきました。数千株の実生個体の中から、0.1%にも満たない確率にかけての地道な作業です。育種開始から登録申請して国から内定公表を受ける(現在の公表は出願公表のみ)までには、順に親品種の保存、交配採種、実生の育成、個体調査と淘汰選抜、2 世代の試作調査、品種登録申請、現地調査確認等を要し、十有余年の歳月がかかります。綿密な管理と莫大な労力がかかる育種作業を繰り返し、1989 年に「瀬戸ジャイアンツ」、「ハイベリー」、「涼玉」、「ブラック三尺」の登録を得たのを皮切りに、現在まで 8 品種の登録品種を誕生させることができました。

瀬戸ジャイアンツ

なかでも、当研究所の代表品種となったのが「瀬戸ジャイアンツ」です。1979 年に「グザルカラ」と「ネオマスカット」を交配した実生から選抜しました。ももに似たグラマーな形、作り方によってゴルフボール大になる大粒のブドウで、露地栽培でも裂果しない画期的な品種です。味はシャキッとした食感、あっさりした甘さが特徴で、何よりも種なしで皮ごと食べられることから、種なしマスカット系品種として注目されるようになりました。栽培仲間からアドバイスを受けて、我が国の気象風土に合いそうな品種のみに絞って交配を行った結果であり、「神様からの贈り物」であると感謝してい ます。でも、当初は、粒の形が独特なこともあって、市 場の関係者 には相手にされなかったんです。「瀬戸ジャイアンツ」は、桃太郎ぶどうの名で岡山県の特産品種とすべく生産組合を設立、栽培技術の指導や普及活動などを行ってきました。おかげさまで、今ではおいしいユニークなブドウとしての地位を確立することができました。平成 19 年には、長くブドウ栽培を行った経験と新品種を作ったことが認められ、妻とともに上京し、農林水産技会議会長賞と園芸功労賞をいただくことができました。

花澤茂さんと奥様の睦子さん（ 2019 年 8 月）

次の課題は、品種の特性を最高に発揮させ、一層おいしいブドウを作る栽培技術を確立することです。その基本は、これまでに解明された生物科学情報を基礎として、自然の法則に沿った栽培体系の再構築が必要だと思います。

当所では、パソコンやネット環境もなかった設立当初から、Fax や郵便などを利用して消費者への直接販売を行ってきました。特に、新しい栽培法で育てた 3～4 品種の完熟ブドウを詰め合わせ、品種特性と栽培法の解説書を添えた「世界のぶどう詰め合わせ」が好評を得ました。

花澤ぶどう研究所は、平成 25 年に息子の伸司に代表を譲り、私は育種とともに農家の方への栽培指導や後継者育成に力を入れてきました。特に育種については、個人的な権利や利益の追求の為ではなく、農業者地位の向上と若い世代が農業を選択し経営できるようにするための方法論だと考えて取り組んできました。私と考えを同じくする人たちが集い結成した花澤会も栽培技術の向上、新品種の育成・普及、内外の研修生の受け入れ、後継者の育成などを行い、岡山南ロータリークラブからは職業奉仕賞を授与されました。また、開発品種の見学に、イラン、イラク、中国、韓国、チリ、ブラジル、アルゼンチン、ドバイ、インドネシア、エジプトなどからも、生産者や研究者が来所されたこともありました。 農は国の基です。農業者は、農作物を生産し販売する職業だということを忘れず、時代の変化や消費者ニーズの変化に遅れることなく、そして消費者に信

頼され、喜んでもらえる商品を提供しなければなりません。既に私は老体となり、介護が必要な日々となりましたが、常に生産性を問い、より高収益を上げることによって、若い人と農の夢が語れる農業、農にかけた農民の自信回復、地位向上が実現することを願う毎日です。

世界初の黄色いシクラメンを開発

育種は植物との対話を通して夢を実現する作業

鹿毛哲郎： 福岡県の南西部、久留米市にある鹿毛真耕園の鹿毛哲郎です。私の父は、米と野菜の農家で、ゴボウの選抜育種も行っていました。私は、高校を卒業後、就農する前に3年間勉強させて欲しいと言って、昭和30年に長崎県農業試験場大村園芸農場に、翌年には久留米にあった農林省九州農業試験場の園芸部に研修生として入り、植物栽培の基本技術等を学んだ後、昭和33年に21歳で就農し、園芸業を始めました。

現在、シクラメンを主体とした鉢物、椿等の花木の生産と園芸植物の生産地卸売業をしております。シクラメンは、収益が得られるものを作りたいと考えていた25歳の時に、近所で栽培していたシクラメンを見て、栽培が難しいが収益性と安定性があると思って栽培し始め

ました。当時、九州で作られていたシクラメンは総数で1万鉢の規模で、暑い九州では作り難いということでした。でも、植物は、地域の環境に適合して生きる力を秘めているものだという確信を持っていた私は、暑さに耐える品種を作ろうと、シクラメンの育種を始めたのです。12月初めに咲く早い個体どうしをかけたグループ育種を行った結果、10年程のうちに耐暑性の強いシクラメンを作るとの結果を得ることができました。長崎県及び九州農業試験場で勉強したこと、九州大、東海大、香川大、宮崎大などの大学、サカタのタネ、ミヨシ等の種苗につながりのある方を持てたことから、広く育種の知識や技術を学ぶことができた私は、本当にラッキーだったと思っています。

31歳の時、オランダ、アルスメールのセルス・クラース・シーセル＆ゾーネン社で3カ月間シクラメンの研修を受ける機会に恵まれ、合理的な経営のため生産手法と経営哲学を学ぶことができました。その研修を終えて帰国する前に、そこの作業長であったデ・ヨングさんが一晩時間を作ってくれました。そこで、これからのシクラメンの育種でどんな品種が作られていくかについて、デ・ヨングさんから①まずは、ビクトリアのホモを誰かがつかまえるだろう（当時ビクトリアは4倍体であった）、②F1での品種の進化が起こるだろう、③黄色の花を世界の誰かが作り出すだろう、④ブルーの花は、我々の時代には無理かもしれない、などの話を聞くことができ、シクラメンの育種の目標を明確にすることができました。そして、黄色のシクラメンの育種に取り組み、25年以上をかけて世界で初めての淡い黄色のシクラメンを開発し、平成8年に「カゲイエロー」と「ゴールデンボーイ」を、平成10年には「ゴールデンガール」を品種登録

することができたのです。黄色いシクラメンの種子は、高価格で販売されたにもかかわらず、販売した株式会社ミヨシでは売り切れとなり、大変な反響を得ることができました。シクラメンの育種は、平成5年からはF1品種育成に取り組んでいます。これらのシクラメンは、国内はもとより20年ほど前から韓国でも販売を行っています。これらの私の経営と技術に対し、平成6年に農林水産祭の園芸花卉部門の内閣総理大臣賞、平成20年には、シクラメンの育種に対して全国新品種育成者の会から育種賞を、また平成23年には園芸文化協会から園芸文化賞をいただくことができました。

育種は長い年月がかかり、リスクを伴う作業です。もちろん技術力は必要ですが、それだけで効果を上げることは困難です。かつては、個人の技術力さえあればよかった時代もありましたが、経済発展と消費の多様化が進んだ今では、情報収集力を高めることが重要であり、それが経営を左右する時代になったと思っています。私は、時代は過去の技術オンリーの一輪車型農業経営で良かったときから、技術力、経営力、情報収集発信力、調査研究開発力の四輪型農業経営に発展させることが、育種の成果を生むために必要な時代となったと感じています。その四輪車経営を行うためには、育種当初から、必要な予算を組み、そして労力と場所をどれだけ使えるかを考え、各種研究機関や専門家との協同（産学協同）を図っていくことも大切だと思います。

私は年代の異なる3人の鉢物生産者と、植物の育種と組織培養の協同研究を行う自分達のP-DESTM株式会社を設立し、産学共同の取り組みとして、宮崎大学の国武教授のブルーベリーとシャシャンボを交配してビルベリー（野生のブルーベリー）に代わる日本産のベル―ベリーを作ろうとする育種を共同で行い、平成15年に私を含めた4人で3品種を品種登録しました。

また、小林塾と呼んでいましたが、元福岡県農業試験場園芸研究所長の小林さんに10年以上にわたってにわたり植物との会話の仕方を教えてもらっていた私たち久留米の園芸生産者で、一緒に育種に取り組むグループを作ったのです。会の名前は、日本の西の端の九州から西風を送ろうと西風会（WWA）と付けました。西風会でカナメモチ、アジサイ、イチジク等の育種を行い、平成23年に私を含めた5人でカナメモチ3品種を品種登録しました。

現在、鹿毛真耕園は息子の信二に社長を任せていますが、息子も平成26年度の全国花き品評会シクラメン部門で、育成した「宴」が新品種大賞をいただきました。今後も、息子なりに物語を組み立てながら、経営を進めてくれるだろうと思っています。

育種は、物言わぬ植物との対話を繰り返すことで、夢が無限に広がっていく作業です。目標とするものを作ることへの期待とワクワク感は、何ものにも増して楽しいものです。植物は我々人間が作っているようで、実は我々に教えてくれる先生なのだと私は思います。環境選択権を持っていないものの、植物は秘めたる膨大な遺伝子資源を内蔵しています。育種とは、その一部を、「ちょっと見せてください」とお願いして、引き出させてもらう夢の作業です。

栽培、育種の新技術の会得、特にシクラメンについては、今も頭に浮かぶ花を次々に咲かせたいと思っています。そして開発した品種が広まり、地域が情報の発信基地となることに寄与できることが私の願いです。

活動暦

11/16　オンライン役員会議
11/19　種苗法改正案　衆議院可決
11/26　参議院農林水産委員会に金澤相談役が参考人として出席
12/2　種苗法改正案　参議院本会議で可決・成立
12/12　育種賞・育種功労賞選考委員会（オンライン）
12/22　オンライン役員会議

伝言板

皆様、2021年の新春明けましておめでとうございます。開始以来、かわら版「育種の波動」も2年目に入ります。コロナ禍で制約のある生活をしていることもあり、今後も会員の皆さんの育種の取り組みの紹介等、地道に育種に励む皆さんに元気を与える紙面づくりに努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

日本で育成された品種の外流失の防止等を目的とした改正種苗法が成立しましたが、私たちの会の金澤相談役が、参考人として参議院の農林水産委員会で発言したことは、これまでにない出来事でした。任意団体で会員も少ない我が会の元会長が国会に呼ばれるとは、事務局の私も信じられない気持ちでした。自民党、立憲民主党等、7会派の議員からの質問に答えた金澤さんの発言を、委員会当日2時間以上にわたり、すぐ後ろの椅子に座って聞きましたが、緊張して言葉が詰まったりしながらも、金澤さんは育種の苦労に見合う収益が得られていない育成者の現状等を述べながら、「育種者として消費者に豊かな生活を提供するためにも、改正種苗法を成立させてほしい」と、育成者を代表して堂々と主張されたことに感動しました。今後は、4月に施行される改正種苗法によって、実質的に育成者家の権利が守られていくことを望んでいます。

今回のかわら版では、我が会の大先輩である花澤茂さんと鹿毛哲郎さんの育種の取り組みを紹介しましたが、いかがだったでしょうか。特に、花澤さんは高齢となって介護を受ける身であるのに、息子さん、奥さんと家族で記事の作成に協力してくれました。毎回のように皆さんの育種にかける熱意を聞いて、記事を書く事務局の私も感動しています。今後も、会員の皆さんの取り組みを紹介していきますので、記事作成への協力をよろしくお願いいたします。

昨年はコロナウィルスで、大きな影響が受けた1年でした。外食の減少等で野菜などの消費が減ったこと、イベント等の中止で花の需要が減ったこと等により、大きな打撃を受けた皆さんも多いと思います。今年も感染者が急拡大し、首都圏で緊急事態宣言が出ました。感染を防ぐための行動により、会員からコロナ患者が出ないよう、お互いに努めていきたいと思います。

問い合わせ先　事務局　岩澤　弘道
090－4059－1096
Fax　03－3691－2818
Eメール　iwa.hinsyudebyu.512@gmail.com